

紅葛

泉鏡花作

—

「はつ、何だ、何だ。」

と、怯えて、運轉手は忽ち自動車を翻然と下りると、崖路の暗闇の中を一筋眞蒼に流した、もの凄いいかり光に射られながら、慌しく背後を透かした。

其處へ、恰も大地獄から、硫黄の煙で吹上げられた、幽霊のやうに、ふら／＼と顯れた肩のさみしい影がある。

崖に生えた雑樹の根に、ぶら下りでもしたかと思ふ、腰はふら付くが、ひた／＼と忙しい跫音、路を上りざまに駈寄つた。

「何だ、何か用か、何ですか。」

「助けて下さい。」

然しか矣り、此この聲こゑの爲ために、夜よるの箱根はこねを唯一たゞひとり人乗のつて打うつ車中しやちゆうの婦人ふじんが、電光でんくわうよりも眞白まつしろな指ゆびで、激はげしく硝がら子越すこしに其そのの運轉手うんてんしゆの背せなかを敲たたくいて、車くるまの進しん行かうを停とどめたのであつた。

「助たすけて。」

と云いふ聲こゑよりも、婦人ふじんは彼かれを輓倒ひきたふしたと思おもつたらう。．．．．．黒雲くろくも低ひくき片岨かたそばの樹きの根ねから、鳥とりが立つやうに、衝つづと出でて、殆ほとんど自動車じどうしやに縋すがりつ着つかうとしたのであるから。．．．．．云いふまでもなく颯さつと切きる轍わだちとゝもに、其そのの影かげは、恰あたかもものゝ怪けの消きゆるが如ごとく取殘とりのごされて背うしろ後に消きえたが。

「馬鹿ばか野郎やらう！」

運轉手うんてんしゆは、峰みねから哄どつと、石いしも雨あめも巻まいて落おとす風かぜと一所しよに、罵ののしめる聲こゑを投なげ飛とばして、一捻ひとひねり昂然かうぜんと胸むねを反そらしつゝ駈出かけたす端はしを、強つよく窓まどを打うつて引留ひきとめたのであつた。．．．．．

「願ねがひます。」

と切呼きれい呼吸きで、聲こゑもやゝ震ふるへたが、其そのの風體ふうていは、と

見ると、縞柄は分らない、何處のか旅宿の貸廣袖らしいのに、青い浴衣を襲ねたのが、跣足で居る。

運轉手は一目見ると、

「何、何を助けるだい。」
ともう一息、急込んだのは無理もない。

が丁どその時、上り坂を崖へ寄つた、左の窓が、音もしないでスツと下りた。此の窓の開いたのは、眞黒な大な巖が、四角な眼を二いた風情である。そして、其處から覗いたのは、半輪の月かと思ふ、細面に鼻筋の透つたのが、薄いシヨオルを深々と掛けて、俯向く状に、頤を襟に埋めたまゝ、若い婦人。トきらりと電光が閃いて射て消えたのに、慄然とするほど美しい。

鈴を振るやうな聲で、

「何うなすつたんです。」

「御婦人。」

と唯呼ぶ途端に、巖を破る雷の響。

これが四つ五つめの激しいのであった。

霜月の二十日前後山は早や錦葉と云ふのに、――
谿河に架けた橋に近い湯宿に居ても、雷の嫌ひな
のが、あの、ごろ／＼と陰に響く車の音を、餘り氣
にしないで可いくらゐ、箱根は夏も雷鳴が少いと云
ふのに、――其の夜は雨に風さへ激しく、殆ど
天變であつたと云ふ。

天變と云へば、人妖に庶幾かつたらう。

國府津の會社が自動車をはじめてから、こん
な時間に、若い女客の唯一人は。

「宮の下まで。――」

まだしも湯本と云へば近いのに。

會社員が恭々しく、其の時、

「御一名？」

と聞くと、

「はあ。」

一寸したバツグを持つたなりで、其の美しいのが
誰も居ず、すらりと亘む。

「いなさ參らう」と云ふ
「古釘
で祝ひましょ、と答ふる。手石浦の物語を思出す。

風もいなさの、時ならず生暖く、折から
大粒なのが、ぼつ／＼と來た頃であつた。

沖には難破船でもありさうな、波は白く、樹
は黒く、風の中空に啗合ふ時。

薄紅梅の地に一重櫻の咲亂れた長襦袢の裄を、と
捌いたと見ると、自動車の裡に姿を消した。

此處からは五里あらう、箱根峠の眞中へ雨を切つ
て、黒雲に乗つて行く
と思ふと、旅客

に馴れた停車場の驛員等も、怪しい音と凄い燈の、
唸を生して、並木へ飛ぶのを、風に吹かれて見送つ
た。

剩へ、夜目に莫大な海月の泳ぐ、暴風雨の山の、
峰と峰とが、頂きの石を摺り合せて、火を切る如く、
チカ／＼と電光が頻であるから。

小田原はまだ宵だつたが、生蕎麥の行燈も、廓の
電燈も、町の柳も、白壁も、たゞ波の如く揺るゝ中
を、鐵の船に車輪の舞ふ通魔が、と軋つて通つて、
風祭から湯本に行く間、渦巻く黒雲の6雙子を前途
に、太閤の一夜城が高く鯨の背を浮かせて、海が一
枚、青く颯と翻るのが窓に映るとゝもに、はじめて
雷が轟いたのであつた。――

「助けて下さい。」

其の事の起つたのは、塔の澤に、早や遠く、大
平臺もまだ遙な、上りの半途の、崖の樹の根の、破
簾のやうな中だつた。

「何うなさいました。」

「貴女、貴女。」

婦人は、其の若造の怪しい風采を視て、一寸言葉
を途切らした。が、電光の又閃めく影に、沈んだ落
着いた様子である。

運轉手は腕を組んで、斜に肩を聳かした。

「お見掛け申してお願いがあります。」

「何うなさいましたの？」

「お車へ乗せて下さい。」

と、差寄せて面を上げた時、其の若造を熟と視

る
婦人の瞳は大きかつたが、

「お乗んなさいまし。」

「御免を！」

と忽ち威勢よく、

「お差支へございませんか？」

と猶豫ひつゝ戸を開く、運轉手の注意には答へな

いで、

「宮の下へ行くんです、構ひませんか。」と
婦人が言つた。

「えゝ、何處へでも、地獄へでも。」

山中には人も知つた、大湧谷、小湧谷、硫黄の地獄の名どころがある。其があるからまだしもであらう。婦人の面影が車の裡へ隠れるに連れて、若造の頭は斛斗返る如く、足を宙に飛込むのを見て、激しい雷鳴とゞもに、運轉手は、フツと唾吐く如く禁厭の息を風のまゝに吹散らした。

「此方へお掛けなさいました。」
若造が進路を逆に、向うの隅へ小さく成るのを見て、婦人は姿を細うしつゝ、颯と薫る其の片袖を教へたのであつた。

「決して、何うぞ。」

「否、一人だと腰が浮いて跳上げられさうで危くツて不可いの、丁ど可いのよ。」

と言葉も解けつゝ、

「附着いて居て頂戴。」
と聲も涼く云ふ。

運轉手は、直ちに把手に手を掛けた。峰と峰とが
罎を籠めて、風雨に雷火を取交はず。

輝く草樹は白き骨の纏るゝ如く、谿川の暗闇に血の
走る、暴風雨の山を、音なき、大車輪は軋り行く。

やがて、燈火の店を開け連ねた、路傍に、籬に、
軒に、紅い花を選つて植た、大平臺を駈抜ける時は、
ダリヤ、サルフィヤの流るゝ紅が赫と照つて、珊瑚
の枝の亂るゝ中へ、藍碧の雨の潮の如く注ぐを視た。

「其の男は何うしたい。」

「まあ、其の人には、私ども吃驚いてしまひま
してございますよ。」
御前

自動車が入りましたから、此方様がお着き遊ばした
と存じまして、

宮の下、新屋の女中、お民と云ふ、銀杏返しいんげんがへの臄ふつく
りした、中年増ちゅうとしまが、敷居越しきめぐしに膝ひざを支ついて、（此方
様。）と云ふ。箱根はこねの夜道よみちも旅たびであ

る。若い婦人わかふじんは、廻縁まはりえんを硝子戸ガラスどで取廻とりまは
した廣室ひろまの眞中まんなかに置いた卓子テーブルの前に、金茶きんちやの地ぢに、
花白はなしろく蔓青つるあをく、葉はを黒くろで鐵扇葛てつせんかづらを刺繡ぬいとりした、恰あたかも燻くす
んだ黄金きんに、銀ぎんと烏金しやくとうで象嵌ざうがんをしたやうに見える、
幽かすかに輝かがやく丸帶まるおびを、薄うすく、太鼓たいこに締しめた細腰ほそこし。絹蒲團きぬぶとん
に無造作むざうさに預あつけたが、黒地くろぢに雪輪崩ゆきわくづしの大島おほしまお召めし、
年の若わかさに派手はでな柄がらも、撫肩なでがたの姿すがたをしめて織ほつそりして、
八口やつくちを透すく其その薄紅梅うすこうばいの、枝えだならぬ花はなの袖そでにはら／
と降積ふりつもるか、と撓弱たわよに見みえて嫋娜なよやかである。片肱かたひぢを
軽く卓子テーブルに掛かけて、女中ぢよちゆうに見向みむいた顔かほは、花はなやかな

電燈の下に、やゝ

蒼みを帯びた。

斜に向合つて、書架兼帯の白木の置棚を背にして、洋装した榮花物語を讀さしたまゝ、頬杖ついた、三十四五の、品よく眉の秀でたのが、温泉の夜を、廣袖ともなく、平御召に卷着帯で、寛ぎながら、威儀の正しいのは
即ち（御前）と呼
ばれたのである。

女中は支いた手を膝へ引き、

「それお着き、と申しまして、何
でございますよ。私ども番頭たち、ばら／＼玄關へ、揃つてお出迎ひをいたしますと、丁どあの、篠を突くとか申します大雨に、又激しい電光でございますて、宛然あの（千筋の瀧）が一齊に眞蒼に燃上りましたやうな中へ、（此方様）がまぶしいやうに、お美しくお立居で遊ばします。

實際それは冷艶なものであつた。

「難有う。」と婦人は、やゝさました體に、

一寸會釋しつゝ微笑んで云つた。

「否眞個でございます。然う致しますと、御前、其の直ぐ後へ、あの方でございます。一所に鳴りました雷様の音よりか、皆が吃驚したではございませんか。轉がるやうに玄關へお駈込なすつたと思ふと――何處か人の居る所はないか。大勢人の居る所はない。――かつて、私どもが、其處に居ります頭の上から、がらん堂のやうに、家中を――して、突然、帳場前を横飛に、あの門の傍に、内へ入ります取着きに、駕籠屋ですの、車夫でございますの、出入のものゝ部屋がでございます。」

「あゝ。」
と殿は頷いて、をかしく聞惚れたらしく頭に手を添へる。

「ちやうど、篝のやうに、火鉢の火を焚いて居りました、そこへ駈込んで駕籠舁たちの胡坐の間へ、突伏してお了ひなすつたんでございます。すぐに、あゝ、雷様が嫌ひなんだ、と、氣が付きましたござ

いますけれども、どんなに驚きましてございませう。
――何處か人の居る處はないか。――も
う、目が据つて、顔色つたらないんでございますも
の。
「

「然うかい、變つてるね。」と軽く卓子を指
で敲いて、

「いや、變つてるね。」と云つては濟まないが、
然うまで不自由でも氣の毒だね、きぬちゃん。」

と婦人を見て、

「お前も餘り好きな方ではなかつたつけ。」

「でも、まさか。私は普通ですわ。」

「それだが顔の色が大層悪いよ、蒼いくらゐだ

よ。
「

「夜汽車にめした上、山の中を、お一人で暴風
雨にお逢ひ遊ばして、お身體に觸りましたのではご
ざいませんか。」

顔の曇りは薄舞の煙の香

黄金煙管を

細く吸つて、

「否。」

四

「唯電光で顔を見ただけ、見ず知らずの人を、助けてくれ、と云ったので、自動車の中へ入れたはいが、大分瘦我慢の女侠だつけな、實は可恐かつたらう。何うかされやしないかと思つて。」

「何うするものですか、又何うかしようたつてさせやしないわ。第一そんな人相ぢやないんですもの。でも凄かつたわ、眞蒼になつてゐて、雷様が可恐いんだつて事は、一目で知れてよ。」

「貴女、お寒いのではございませんか。ばつたり雷様が止みますと、急に冷く成つて参りましたございますから。眞個お色艶が。」

「實際、蒼いよ。」
「大體が黒い處へ電光の鍍金をかけた所爲でせうよ。崖縁の草と一所に身體へ浸透る

ほど光りましたもの。」

と空色鼠に藤の縫ある半襟に掌を外らして當てゝ、
俯向いて胸を見て、

「遙々推掛けて参つたのが、そんなに濟みませ
んね。これでも湯へ入れれば玉のやうですつてさ。」

「ほんに、早速お召し遊ばしては如何でござい
ます。お心持がさつぱりとなさいませう。」

「入つておいで。」
と卓子に腕を組直して。

「其の内に御馳走が整然と出来ます。」

「ですが、今の人が來ます時、私が居ないぢや、
跋を悪がるでせうから、お兄さんにお引合せをして
置いて、それからの事にしますわ。」

と優しさが瞳に籠る。

「大きに、然うだね。お民さん、

何うだい。」

「見て参りませう。松がお迎ひに行きましたか、

何うなさいましたか知ら。」

立たうとした時、廊下へ跽音。雷の後は、がらんとして一層響く、障子へ半身でお民が覗いて、

「あゝ、お見えに成りました、貴方、此方。」

「これは御苦勞です。」と件の若造は、前へ立つた島田鬚に入交る、其の女は、悪く澄して、一つお辭儀をしながら、ばた／＼と引返す。笑を忍んで居たらしい。

「さあ、貴方、もうお待兼ねで在らつしやいますよ。」

此を聞くと然も繼穂を得たらしく、

「それはどうも。」

と元氣よく云つたが、向つて衣桁に掛つた婦人の羽織を見て、其にも挨拶をしたさうに目を配りつゝ襖際へ。

「失禮。」

と面を向ける。其處に二人青疊に繪に描いたやう

な對座を見て、不意を啖つたやうな、又心得たやうな、執方附かすの敷居の上で、廣袖の膝を眞四角に坐つて、

「申譯のない事をいたしました。」

「何ですね、言譯なんかなすつて。」

と、居坐が一寸動いて、

「あの、此の方なんですよ。」

「はじめまして 途中御難儀をなす

つたさうですねー 誰しも嫌はあるものです。

お察ししてますよ。しかし、最う此處へ在らつしやれば御安心です。それに、可い鹽梅に、すつかり鎮まりました。」

若造は心から頭を下げた。

「お言葉で汗が出ます。生命とも、何とも、夢中で御禮をいたしました。眞個お庇で助りました。

ですが、申譯がありません。」

「あゝ、お堅い。こんな場所で然う御慇懃では

困ります。お互に遠慮なしに

なぞと

云つて、高い處で失禮ですね。さあ、づゝと寄つて、
貴方もお敷き下さいませんか。」

座蒲團は、卓子に洲濱形に。

「さあ、でないと窮屈で困ります。裸體でお附合をする處ですから。」

ふと婦人を見て莞爾して、

「いや、此は誰方かゞお在でだつけ。」

「構ひませんわ。」

五

女中が附いて、二人温泉に行く

聲音

の通ふのを耳を澄まして聞くやうだつた。また其の時まで、席を進めないで、畏つた此の若造の旅藝人、秋山謙介、と、それは彼が自ら名告つた。

其の名告つた時、次の室に鐵瓶の下へ炭を繼いで居た女中が、旅藝人と聞くと、振向いて濃い眉毛を額へ離した。

「何をなさいます。」

殿が問ふと・・・衣紋に白いハアト形の腕で、艶々と前髪を斜に支へて、瞳を大きく打傾いて美人が見た時、若造は猶豫ひつゝ俯向いて、唯苦笑したのである。

「琵琶ですか。」

此の問は當を得たものと云つて可い。怪しげな廣袖に襷衣を着込んで、紺木綿を尻帯にして居るのであるから。

「そんな！ そんな名のついた藝ぢやありません。さのさ節と、阿呆陀羅經です。」

女中の呆れた事。

「結構よ、お酒の時に聞かして下さい。」

ぢやお兄さん

お湯へ。」

女中が、不斷の浴室は、男女兩方とも、晩方から、遠足の學生たち四十人ばかりに貸切りに成つて居る。平時は狭いのでお嫌ひだけれども、貸切の方へお召しをと云つた。

「猿の湯だね。」

「へい。」

「何うして？」

「階下の突當りの、奥の一番隅。窓から赤い顔のものが覗くとさ。」

「可厭だ。」

氣味の悪い。」

「貴女、嘘でございますよ。」

「でも一人ぢや可厭、お兄さん、一所に行つて頂戴。」

紳士は爽に笑つた。

「其處を狙つて威したのさ。」

「何うせ、おのろけの維也納とやらの公爵夫人のやうには参りませんよ。珍しくもな

い癖に。」

もう次の室の衣桁の前に、する／＼と帯を解く、

片端をお民の手に受けさせながら、

「秋山さん 一寸、一所に入りませ

う。」

お民が三度吃驚した。

「飛んでもない。」

「構ひませんよ。」 とまた殿の心易さ。

「まだ胸がどき／＼します。雷も止みましたばかりの處、裸體で湯處ぢやあないのでから。」

「餘程お嫌ね。」

「ぢや、お心任せが可からう。」

で、誰も居なく成つた時、旅藝人　――　阿呆陀
羅經の秋山は、一人でぽかんとしたやうに突立つて、
「はてな。」

次の室へ出ると、其の壁際と廊下の
隅なる、鉢形の眞鍮の火鉢の前に、骨を抜いたらしく
頽然と成つて、茶盆に半ば掛けた布巾を摺らすと、
吸子を取つた、が一寸重い。

茶碗を仰向けて、打まける如く注いで、湯氣は白
く火は赤いのに、冷めたいのを一呼吸に二と飲んだ。
吻と呼吸して、

「あゝ、助つたぞ。」
と目の覺めた體して、もの珍しげに、澄透つた空
の如き廣い座敷を二した。衣桁に靡く月夜の虹。沈
める黄金、浮出る紫。

「龍の如し。」
颯と血の通つたらしい生氣付いた、片頬に寂しい
微笑、懐中へ手を突込むと、敷島の箱を出したが、
残つて、四五本ある、一本抜くと吸口の繼目が切れ

て、ぐんなりで、次のも、次のも、折れて居たり破れたり、暴雨に夢中だつた、しとりが透つて、ものゝ用には立つべくもなかつたので、

「ちよツ此方は蚯蚓だ。」

一掴みにして投げたが、掌を火鉢に拂いた。

「召上りましな。」

お民が引返して入つて来ると、其處へ、盆に五個ばかり巻苜を積んだのを、渠は片膝立てゝ熟と視て、

「姐さん、一體、誰方なんだい。」

お民は薄目で一寸見て、

「廣澤様、御華族様。」

「然うか、貴族院の。――伯爵廣澤頼基さ

ん。」

「御存じでせう。」

「名は知つてる。御婦人は。」

「聞きなさいまし。おほゝ貴方、

御酒は召上りますでせうね。」

よ。

「飲^のんでも可^いいか知^しらん。」

「え、ちやんと、然^さう御^お申^ま付^をけに成^なりました

「これはお楽しみ最中。」

前後して湯殿から續いて歸る、伯と婦人に入交はつて、秋山は遁ぐるが如く入浴に。自稱旅藝人の謙介が、頃刻して濡手拭を提げて戻つた。――欄干は晴れて硝子戸越の雲かと思ふ、黒い明星ヶ嶽の頂きに、青く星が見えるやうに成つた怪しい龍は姿を消した、帯はもう其處にはない衣桁に手拭を掛けて、座敷へ入ると、先刻の榮花物語で黒檀の大食卓の三分一を仕切つて、對向で、小形のトランプを弄んで居た。

「食事を御一所にと思つてお待をする間に

――

然う云つて、伯が、さら／＼と雪を散らすが如く骨牌を捌くのが、音のない、聲のない、一種虞美人草の譜を、手尖で巧に奏づるかに見える。記號の黒いのは、ちら／＼と、それは蕊である。紅なるは、其の花片である。と。そして、扱ふのが峯るのでは

ない、摘むのである。摘んで散らすのでない、織るのである。

唯、あの二重に合す吉野紙、湯上りの霞を籠めた
両の手に、ほんのりとした顔を載せて、若い婦人は
熟と視ながち、フト忘れたやうにトランプの彼方此
方に指さしをするのが、齊しく温泉に霑つた唇の色
が手に染んで、骨牌の記號の紅にこぼれて、囁いて
揺れて、ものを言ふ。
すると、黒い艶やかな點々は、伯の清らかな瞳が無言の聲に答へて
動くやうであつた。

其の唇と瞳が頷くらしく見て取られて、骨牌は、
一絡めに重ると齊しく、婦人の伏せた掌の中へ隠れ
て、すぐに洋装した榮花物語に、込つた。

「食事をはじめませう。」

伯は投げるやうに書棚へ納め、謙介に振返つて、

「さあ、此方へ。」

と軽く言つた。

「此處で結構です。」

と謙介は、舊の座を尚ほ一腰引いたが、トランプの後を覗くやうにして、

「まるで素人には分りません、孰方がお勝ちです。」

伯は無邪氣な微笑で、

「合戦と見えましたか、何、勝負ではありません。二人で話をして居たのです。」

「お話。」

「え、貴方のお噂を。」

と莞爾する、婦人の唇はハアトの一。

「私の噂を。」

とニつた瞳は、疑に稜つて、可笑しなクラブの形と言ふべし。

「口で饒舌つて、湯へ入つて在らつしやるのに、噓をなすつて、風邪をめすと思ひましたから。」

「温室の花の、夢に蝶がものを云ふのを聞いて
居ますやうな心持です。」
トランプの記

號でお話が出来ののですか。」

「あの、維也納とかで、侯爵夫人のお仕込です
とき。私のは、ほんの、又ペイトとハートの平假名、
ダイヤとクラブの片假名まじりで、どれも、ほんの、
いろはなのよ。」
お兄さんの方は、此でど
んな秘密な込入つた事でも、主人の居る前で、其の
奥さんと、忍び場所の約束でも、お政事ごとでも。」

「お黙り！
酒は何うしたい。」

「一寸お燗を直させました。」

其處へお民が、廊下が長いのに、悠然と。

「御辭退しないで、推參します。」

謙介は、ものゝ興奮した景色で、正面に直つて、まだ杯も手にしない、白面に色をのぼせて云つた。

「實は中學校の教師です。」

それは、膳に向ふやうに、伯と婦人に座に請ぜられた時、直には敢て膝をも進めなかつた後である。

「旅藝人の門附風情が御同席さへ。」

此で、結構です。」

「別にお座敷を言附けませうかね。」

謙介が頑として膝を疊に着けたのを視て、廣澤伯は婦人に言つた。

「然うね、懃かお構ひだてをして、お氣詰だと不可ませんわ。」

伯が一寸向直つて、

「秋山さん、ーでしたね。」

「いや、石山でも、草原でも、禿山でも、そん

な事は些とも構ひません。」

「お座敷を別に差上げませう。實は初めから其の方がお窮屈でなくつて可いかとも思つたのですが、女がお伴ひ申したゞけに、お隔てをするやうで厭ですから入込みに願ひました。――お民さん、しかし、お近い處が可いね。」

「畏りました。では、一寸お支度を。」

謙介の傍に、つい居た女中は、膝を一つ退らして起つ。

「相濟みません。」

謙介が會釋する時、婦人が薄紅梅に、簾を雨の如く白で霞めた博多の伊達巻で、すつと襖を深く素足で起つと、卓子の周圍、あの置棚へ。中の棚にあつた、蒔繪の硯箱に、用意がしてある紙包。蓋を裏返しにして、中に入れて、留南木の薰、近々と伯の肩に引添ひながら、と膝を謙介に向けつゝ、斜に胸を浮かすやうに、ついと出す。

爰た、其の包に、此は伯の手で、（御酒）とし

中に据

てあつたのである。

「ほんのお印までゞすよ。」

「實に輕少。」と伯が言つた。

謙介は目をニつた。

「失禮ですけれども、貴方、藝人衆でおいでなさるなら、お腹立もないでせうと思つて

何うぞ、お納め下さいまし。阿呆陀羅經を聞かして

頂戴。」

と笑が皓齒に細く透る。

「唯今、讀みます、後とは申さず」

（實は旅藝人ではない、中學の教師である、と則ち名告つた。——）

で、當人は爾く興奮したらしい態度であつたか、伯と婦人は澄して一寸頷き合つた。

「故とお褥を頂戴ませう。」

「何うぞ。」

「お次手に其方へ行らしつて下さいな。然うでないとい、私が又一廻りしなければ成りませんもの。」

早速に身近な蒲團へ。

「さあ、先生。先刻、貴方、自動車に召す時、一所に地獄へでもッておつしやつたわね。」

「御免下さい。」

擡ぐる腰に力を入れたが、膝は投げるやうに、へた／＼と褥に着くと、床しくもある哉、留南木の餘波が、絹より、綿よりも柔い。謙介は宙に浮く、心を沈めるやうに、確と額に手を當て、

「まだ夢を見てゐるやうです。」

「今お讀なすつたのは、勸進帳と云ふ處で、大分苦しさうでしたな。」

「いや、實に阿呆陀羅經です。が決して、其の

御包は頂戴しません、其だけは何うぞ、平に御容赦に預りたいんです。」

「でも、お兄さんが折角

可ござん

す、私が。」

と蓋を取る、蒔繪の萩の玉章を、忍ばす状に、襟の中へ。白紙の端は、伊達巻に媚かしい。湯上りの髪は、早や何時か、櫛巻に解かれて居た。すなほに丈に餘るほど、散らすも解くも、結ぶのも、綾とり
の絲より早い、櫛の捌きが想はるゝ。

杯さかずきは一順じゆんした。廣澤伯ひろさはくは唯受たゞうけたばかりである。あひはニツ三ツ婦人ふじんがした。酒さけを飲のむ男をとこの、猪口ちよくを手てにしたのは、悄しをれた草くさの、甘あまく且かつ芳かんばしい露つゆに甞よみがへるが如ごときもので。分わけて、温泉いづゆを浴あびて、意味いみある美人びじんに對たいしたれば、月つきに向むかつて流ながるゝ光ひかりを、根ねに、莖くきに、颯さつと注そがれたに異ことならず、怪あやしく黒くろい花はなも咲さきかねぬ。特とくに心細こころほそく膽きもの小ちひさな男をとこの、情じやうの激げきした、病やめるものゝ如ごとき折をりの此この注射ちゆうしやは、猶更なほさらである。謙けん介すけの態たい度どは宛然さながら其これであつた。

「私わたくしなんぞは、事實じつこ此これが旅藝人たびげいにんでありますよりか、尚なほ、さがつてゐるかも知しれません、教師けうしだつて其それがです。」

謙介けんすけは追掛おひかけの酌しやくを、婦人ふじんのしなやかな手てで受うけて、
「其その中ちう學がくの學生がくせいに、日ひの暮方くれがたの路みちを教をへる、化ばけた案山子あざしとも行ゆかないので、實じつは
圖畫科づくわくわのお雇やとひ、畫ゑの教師けうしなんです。」

銚子を婦人が引寄せると一所に、伯の注意で女中は席には置いてなかつた。

「で、更まつて、申しますのも變ですし、恚うまで御迷惑を掛けますのに、まだ何か、貴方がたに、自分と云ふものを、此以上結びつけますやうで恐縮ですが、實は一度、以前に、お目に掛つた事があるやうに思はれます。今夜がはじめてとは思はれない氣がしますんですが。」

「私たち、二人ともでせう。」

と伯は怪む色もなく、一寸箸を休めて笑つた。

婦人も此を待つたやうに、仇氣なく流眊して、

「先生、私が當てませうか。」

「はあ。」

「近い事ね、向島の奥、白鬚の、もつと先。」

「

「何うして貴方がた

」

とやゝ狼狽へて、何方を見ようか迷つたらしい、

左右の瞳を杯に注ぐ。ト恥ぢたる色して、

「何うして貴方がた」

「お忍びで、先生、着流で、頬被をなすつて、一寸意氣だつたわね。柄にお似合なさらなさう

な。」

「馬鹿な。」

伯爵は微笑ながら

「柄にないとは何だい。」

「だつて、繪を遊ばすんだつて、學校の先生だ
とおつしやるんぢやないの。」

謙介は又上氣たらしく、肩を聳やかした手を、膝
に落したと思ふと、懷を狭く身を緊めて、首垂れた。

「一言もありません。その了簡なればこそ、自
分で門附だと言はなければ成らないやうな羽目に立
至りました次第なんです。（千三百石から馬追。）

と言ひますが、こんな畫工から旅藝人ぢや、雀が
箱根山で蛤です。孰方が下落だか分りません。鰻に

ならない山の芋です。はじめから、目鼻の分らないやうなものを、しかし何うしてお見覚えがありました。

伯は卓子の端に手を置いて、

「此女はね、目が凄いい。露西亞あたりだと、國事探偵でもしさうなんです。」

「酷い事、お兄さん。」

「そのかはり秘密はよく守る質です。」

お見受するのに、御様子に何か隠れた仔細がおあんなさりさうです。秘密は守ります。事情を御話なさいませんか。

私は些とも知りません、覚えても居なかつたんですが、此の女はね、先刻、山の半腹で、電光で御顔を見た時から、多分、向島の其の方だらうと思つたと言ひます。そして、ランプで話合つたのも、貴方のお身の上に就て、其等の種々の事でしたよ。」

知らず、星も、花も、目のあたり我に囁く。

風も、山も、

折から谷川の音

が響いて、謙介は悚然とした。

「お惚氣なさいな、聞きたいわ。鬱がないで

さ。」

衝と銚子に向けた婦人の手も、月が送った雁の雪の頸に似る。

「忘れもしません、彼の晩は十五夜でした。が、
 當人血眼の大童とおぼろは、自家廣告のペンキ塗に
 電燈を通して、上野の空へ、仁丹ぐ
 らゐに顯さうと、其の展覽會の繪を、青やら、赤や
 ら、七面鳥で塗つてます最中で。」

隅田提へ月見なぞと、そんな餘裕のあるのぢやあ
 りません。此體裁で。それだけは憚りますから名は
 申ませんが、故人に成りました師匠の墓が、木母寺
 の傍にあるんです。道は遠し、世帯にかまけて、御
 無沙汰勝の處を、苦しい時の神だのみで、其處へ墓
 参りました歸途だつたんです。ですから、紋着の羽
 織を、勿論怪しげな。でも、團子が五つで、月夜に
 は目に立ちますから、貴方がたが月見をなすつた、
 あの紅夢園の萩の中へ忍ぶ
 いや、潜込
 みました時は、引丸げて帽子と一所に懷中へ捻込
 んで頬被をしました。此が不心得だつたんです。悪く
 下町の人氣のよくない所で育つたもんですから、小
 雨の夜なぞ、錢湯へ行くのに、遣りつけて居ますの

で、一廉顔も隠したつもり。そして、あの時は手拭ぢやありません、手巾でしたよ。

「良い月でしたな。」

謙介は背見らるゝ状して廊下を覗いた。

「それ、そんなに星が出ました。もう、雷は大丈夫、安心してお話し下さい。」

と伯・が云つた。総硝子の連る戸は、星影に山を透かして霧の幕が座敷を包む。遙に湯殿に人聾の響くのが、大池に鷗の鳴く氣勢。行く秋の夜が身に染みる。

婦人も美しく猪口を含んだ。

「ぶら／＼土手を行くと、道が橋か、橋が道かと云ふ、薄靄のかゝつた夕月。あの。白鬚橋を渡つて見よう。丁ど雨上りの水が眞白で、潮がたつ／＼と満ちて来る、それは、明月を迎ふるための流るゝ街道。橋に乗つたら船のやうで、嘸ぞ

佳い景色だらうと思ひましたが、最う渡ると橋場は町です。歸るに惜しい。

で、土手には薄、田には蘆で、明い欄干を附けた、月夜の橋かと思ふ畦道らしいのを歩行いて居ますと、ふと、足許の草の上へ、ひら／＼と映つた、と思ふと、薄へかゝつて、穂摺れに颯と薄墨を散して、そして空へ消えて行く、五つ七つ斜に連つた影があります。あゝ、雁が渡ると、思つたんです。

が空を仰ぐと、高い樹も、遠くの森も何にもない。其の鳴く聲も聞えないで、却つて、鐘ケ淵あたりのボーと云ふ汽笛の音が、刈田の水に響くんです。萩も蘆も、さら／＼と戦いで心細いつたらないんです。

又はらりと映りました。矢張り草に散つて、薄に亂れて、すつと消えます。其の影を辿つて、空を見れば月ばかり。ひら／＼と直ぐ影が映します。つい／＼誘はれ、誘はれて、紅夢園の門の、小川まで行つて、あの薄白い船の底を渡したやうな橋の上へ、

其の影が、又ばら／＼と映つた時、女の袖が六つ七つ月に描かれた風情でした。

尤も、其處を紅夢園、とも、貸席とも、お茶屋とも、別荘とも、大な植木屋の庭とも知らないんです。

私は、夢のやうに誘はれて、其の影の映りました小橋の中ほどへ、
・
・
・
崖の釣橋を踏んだ氣で立ちました。

又、映りました。今度は向うの木戸の處。
・
・
・
袖が揃つて招くやうです。勿論、其の招くのは月でせう。が、私は浮り渡りました。

草が數へられます。三味線草も犬蓼も、猫じやらしの穂も、裏へ銀を染めて、すすきりと、露に伸びて居ました。其の雑草の路が、やがて兩側の萩に代つて、其の花の中に門、葉がくれに扉がある、それが、開いて居たんです。

幽に木の葉、草の根を透して、露に濡れた灯の影

が遠くに見えると、萩の葉を渡つて、優しい鳥の歌ふと思ふ、若い女の聲がする。遙に飮するやうに。

それが、唯、聞えるのに調子があつて、四五人で調子を取つて、唄を唄つてゐるらしいと思ふと、軽く砧を打合す足拍子が、近く白玉の露を轉がしました。

見たくつてなりません。素面です。怪しい支度です。右の面目もない手巾のすつとこ被。自分申譯をすれば、魔に魅されたものかも知れません。雁の影、袖の影は、もう其切、目に遮らなく成りました。

が、當人は潜込んだ。樹よりも高い萩がある。時々、はつと顔に蓋して、驚かすのは大輪の芙蓉の花で、關守らしい大木の松が一株。月の築山の峠を越すと、蘆を透して池が見えて、錆びて居ました。緑青色の萍へ、鯉か、鯉か、白い水足を引くたびに、月影が、處々眞青に結ばれるんです。

眇と廣い。其の水の向うに、霧を研澄したと云ふ
燈の障子が長く、咲亂れた秋草を浮模様うきもやうに仄ほのかに裏透うらす
く中を離れ、藤棚がありました。葉は落ちたが竹が
明るい。其の間を汀へ掛けて、月を前にし、背後に
し、影を透し、光を浴びて、同じくらゐな脊恰好、
腰の細いのが髪を、黒く、爪尖を眞白に、庭下駄の
なりで、すらりと七人、ものは知りませんが、袂を
揃へて踊つて居ました。

此だ、此の影が、流るゝ白銀の絲のやうな月の光
に誘はれて、雁の姿に宿つて、萩、薄、蘆を渡つて
靡いたんだ。

私は見惚ながら、人の居ない、灯もない、一棟離
座敷の、開いたまゝの濡縁へ、腰を掛けて茫乎して
視めて居ました。

目の前に梅の樹があつて、仙人が杖を投げたやう
な其の差出た枝に、武藏野をのぼる明月は、摺々に、
其處へ来てイむ
臺に成る。

金色の薄雲は、枝に袂紗を掛けて居る。向うに踊る

女たちは袖の運びの一人々々、順に胸へ、影染む乳へ、其の月を抱く。縋る。招くんで

す。……あゝ、何の唄も戀であらう。恚うした時は遣瀬がなからう。春の花に結んだ心は、秋の月に解けて、白銀の光に流れて、膚も消えて、大空に魂ばかりあこがれる、其の魂が雁の影を遠くへ映して、萩より柔に、薄よりも細く靡く。帯ばかり、袖ばかり、衣服ばかりが踊ると見える。

風が吹いて、ふつと消えはしないだらうか。いや、然う云へば自分は何うした。夢を見て居ないかと心付く、と枯枝の中に落葉が掛けた四阿が、草深い中に見えて、其處を池なりに廻つて、あの藤棚へ續くらしい。其の四阿の中に――ふつと立つて、大な兎の影が見えたんです。

私は吃驚したんです。」

「兎の影を

待つて頂戴。」

婦人は一寸言を入れた。

「あゝ、貴方。」

と向きかへて一膝寄つて、

「それは、四阿に洒落に置いてある、張子の大きな招猫なんですわ。ねえ、兄さん。」

「しかし、お話の様子だと、其が兎で、池の波を渡つても差支へありません。―― 當夜の主人で、現に、その藤棚の中に、一人で立つて視めてゐた私ですが、今伺ふと、何うか、其の時、月の中にも入つて居たやうです。お底で、おもしろい月見をさして頂く、貴方、お杯を。」

「まるで召上らないやうですが。」

「少しも飲けません。が、杯を持つべき處です。きぬちゃん酌をすべき處だね。」

「はい、はい。先生それから。」

「いや、後は貴方がた御存じの通りです。突然わつと云つて絶叫したものがあつた。私も驚いたが、先方は其處へ尻持をついた。慌てゝ遁げようとする

と、蹶然立つて、や、此の泥棒、――で獅噬着く。瘦せては居るが、遅い、脊の高い爺様で。」

「紅夢園の風呂番の嘉一爺や、夜廻をした處。

ほゝゝ。」

と笑ふ。

「親爺は幽霊だと思つたさうですよ。」

「幽霊？」

と謙介は興覺めた顔をする。

伯は微笑んで、

「それはね、紅夢園がまだ現在の女主人の手に入らなかつた以前、ある人の別荘だつた頃、月のいゝ晩、秋草の中を二人で忍込んで、然も、あの亭の疊を裏返して、其處で情死をしたのがあります。爾時――お座敷を拝借する。相濟まない次第ながら、お庇で、いゝ心持に死ねます。舞臺の氣がする、蟲の聲は清元の出語りだ――つて意味の遺書を殘しましてね。情死は眞個にし了つたんです。」

其の遺書が傳はつて居ますのを、今の女主人が、
悟つてるから、額にして、あの亭に掛
けて置きます。しかし、女どもは薄氣味を悪がりま
す。

其處の縁に、貴方が月あかりで薄りと描いた繪の
やうに
なぞつて素人の癖に

まあ繪のやうにです。蒼白く、さうして、寂しく、
胸を暗く、腰を掛けておいでだつたさうで、的切、
幽霊

「ぢや、立直つて組着いた時は、狸と見分けが
付いたでせうな

と謙介も苦笑して、
「二つ三つ揉む間もなく、頸首を壓へられて、
梅の根へ膝を支いた時、いまの、あの兎の幻に、翻
然と重なる女の姿。袖が、薄い雁の影で。池を廻つ
て、駈出して來なすつた。其の時ちらりと見た顔は。
此方は、すぐ俯向いて了ひましたが、

忘れはしません、此處においで
ですよ。」
なん

婦人の瞳は艶かに輝いて、ふと俯目になる謙介を見た。

「續て——危いよ——危いよ——
響いた聲は、清い男性——それは伯爵、貴方だ
つたと今思ひます。」

ト腸に月の雫の染むやうな、爽に、うるほひある、
優しい言葉がかゝつて、冷いが、軽く、もろい、霧
の袂が、此の肩に。」
と身をしめて、謙介はやり違ひに、しつかりと。

坐つた丈も高く見えて、
「其の人の手に、ほんのりと籠の雪洞があるの
で、頬被の上へ、袖を被つて窺みました時、——

（草の花は咲きましても、月に枯野の一軒家、枝
折戸も結びませんから、道にお迷ひなすつたのです。
出口をお知らせ申しませう。女郎花、刈萱も折添へて
持ちません。風情のない、草刈女が、山路の御案内、
さあ、おいでなさいまし。——）

で、ひよろ／＼と成る奴に、茂つた萩と、衝丈の
肩を貸して、支へるやうに引添つて、籠雪洞の棲摺
れに、はら／＼白露を別けながら、蜘蛛手の池の落
口を月影に渡つて辿ると、入つた時より近路で、

―― お静に ――

此方は、とぼ／＼としながら、空の月より、蘆葉
がくれの、雪洞を、抜出した自分の魂かと思ふ、振
返り／＼、やがて一散に駈出して、白
鬚橋の欄干に、どうと成ると大息を吐いたんですが。

――
あゝ、矢張り、助けて下さつたのは貴方でせう。」

「否。」と細い煙管を膝へ、

「口惜いけれども、其の立女形は私ぢやないの。」

私の姉さん、
――

「紅夢園の女主人でしたよ。」

「即ち
でせう。兄さんのお氣に入

り、

「

「一きぬ〔、〕ちゃん、お黙だまんなさい。あわ
てもものゝ、お先さきばしりで困こまります。ですから、一は
ながけに、亭ちんへ駈かけ出したのは此これ女めでしたよ。」

「仕出しだしたわね、
尤もつともお月つき様に浮う

かれ出だして、出でたらめ踊おどりの音頭おんどとり取とりは私わたしだつたの、な

ほ悪いわるのね。」

と仇あどけ氣けない。

十一

「一ひと晩ばん、死しんだものゝやうになつて寝ねると、さ
あ、目めが覺さめる。朝あさ日ひと一しよ所しょに、昨ゆう夜べの雁かりが金こん色じきの
翼つばさを擴ひろげて、引ひき窓まどから飛と込びむばかりで。

感興神來と云ふ勢です。

其の癖、商

賣往來で、筋骨を刻込んで、次手に女房の衣類を殺して、半年ばかりかゝつて居ました。もう出来上らうと云ふ、其の展覽會の畫が、忽に可厭に成つて、打棄つて、あの雁の影に誘はれて、女の魂が月に流れて、姿が冷かな光に溶けて、氷蠶の錦、袖六尺。五つの木の薫を散らして、空蟬の衣ばかり。七ふり揃つて、花野の中に舞ふ處、天の意をうけたと思ふ。其が描きたくつて成りません。

氣が狂つたと、人には笑はれ、魔が魅した、と女房には泣かれながら、目を瞑つて遣直しの仕事にかゝつて、其のかはり、寢食も忘れしました。お恥しいが、此は事實です。」

と冷く成つた猪口を嚙んで、惘然として、

「身も魂も、紫に赤く、血を白く青く注込んで、前の試は半年滯り滞つたのを、これはたゞ十日くらゐ。其處で描上げたんです。——今更其の畫も詰りませんが、口で言ふと尚ほ馬鹿々々しい。

—。

手も足もない。衣類ばかりで七つ舞ふ。これを墨で淡く、月夜にひら／＼と映る雁の羽が、舞踊る衣類の影に成る。此の影の方を極彩色で、首は雪よりも白く翼は虹よりも濃いのです。蒼空の月は、舞ふ女の、戀です、愛です、憧憬です。薄雲の靨黷く、それ等一つ一つは、女の七つの魂でした。

空腹に杖を支点、車のあとに引摺られて、ポンチですな、締切の日に持込む途中、雨に逢たが、暴風雨のはじまり——。いや、素晴らしく落第です。

打棄つてくれるのが情だけれども、落第した絹地は、會場の芥埃で、掃除をする小使が迷惑します。仕方なしに骨を拾って、塔婆握りに上野の山から掴んで歸ると、——女房は里へ遁げました。

媒妁人と云ふ橋があれば、箆笥を提げても渡られます。仔細はない。尤も、よく、それまで辛抱したと思ふくらゐ。」

「お小兒のは。」
と婦人は急に聞いた。

「僥倖にないのです。但し子がないからつて、別にお腹のたしにならない。餛飩ばかりぢや凌げませんし、第一、世間に面目なし、丁ど世話をするものがありませんから、其處で地方へ駈落です。教師にお雇を被りましたのは、千葉縣の或中學校です。」

「雁先生が粟を喰ひにござつた。」

生徒が黒板に白墨で、れい／＼と書いたもんです。

餘り馬鹿げた畫だつたので、何か新聞でも冷評したんでせう。風説はもう知れて居ました。……寧ろ名譽です！」

と、魂が抜けたらしく、落膽、卓子に胸を折る。

「嘘、口惜かつたでせうね。」
思ひきや！ 衝と薄紅梅の、袖口が目を蔽うて、

雪なす頬が、半襟の藤に差俯向く。

思はず此方も、誘はれて、ほろりとしたが、やがて、膳を衝と除けて、

「何うなすつた！ 何う？」

謙介は、自分では婦人の瞳を晴させ得ないで、顧みて伯に迫つた。

伯はそれでも微笑みながら、

「いやお察し申します。それと一所にしては失禮かも存じませんが、此女もね、矢張、藝の事で舌を噛切りたいくらい。惜い事があつたと云つて、それがために自棄半分に、此處へ飛出して來たんださうです。先刻ランプの前に、一寸愁歎場がありましたよ。

否。まあ、それは後で。

貴方は、で何うなすつたんです。貸廣袖の形で、箱根の夜道をなすつたと云ふのは？

「

實際、彼は性の知れない、廣袖に三尺で居たのである。

「此の上の強羅の丘の家、昔の建場と云つた宿で、借着をしたのを、着遁をしました。勿論、洋服を着換へたのです。小田原へ出たら、古着の袷でも買込んで、そして、送り返さうと思ひました。」

と謙介は言つた。

「實は、學校の上级生が、此の箱根へ秋季の遠足、武装して行軍と云ふに附いて参つたのです。今朝塔の澤を出發して舊道をずっと蘆の湖から、権現の御宮を廻つて、大涌谷を越えたのは、午後二時頃でした。」

猛者も健兒も英雄も多い中に、私なんざ衛生隊で

す。左の腕へ青い切を巻いて白十字をつけたんでし
てな、同僚の會計が一人、學生の中から一人、と都
合三人。大涌谷から先發して、晩の舎營の準備のた
めに、すた／＼岨路を故道づたひに此の宮の下をさ
して下つて來ましたした。

山家二三軒、柿の實の色着いたのが霧の中に遠く
山の端に見える。一箇所、路傍に古池を取巻いて、
なぞへに滑つこい柔かな窪地がありました。實に

其處の薄ほど美しいのを見た事はありま
せん。白い膚が光ります。月の宮の蠶の絹を、銀の
梭で雪に織つた羅で、二本揃つたのがあります。一
本分れたのがあり、三穗摺合つたのがあり、すら／
＼と手許に靡く、ちら／＼と揺れる、揺れるのが、
ものを云ふ、靡くのが、歩行くらいしい。
で一つづつ、生きて、呼吸して、豊艶したのが乳か
と思へば、滑らかなのが胸かと思へば、細りとしたの
は、咽喉です、頸です。長みを持つたのは圓い肩で
す。そして残らず顔です。皆裸體です。

中には白粉刷毛を持つたのがある、紫の花を翳し

たのがある、眞紅の玉を飾つたのがある。
或は、手を組み、背を合はせ、抱き合ふ、縋る、纏合ふ、離れて下草の石に伏して寝たのがある。追つかけるのがある。遁げるのがある。腰をついて蒼空の雲を見るのがある。瑠璃色の天に、折から薄曇つた、白い一團の雲は、此の女達の影が倒に大きく空に映つたやうです。

池の水を浴びるのでせう。それへも、ちら／＼と姿が映つて、その膚に、湯の煙かとも思ふ、冷い、薄い靄が靡いて見えました。が、どの姿も濡れたとは見え、涼い山氣と、透通つた、空氣の中に、唯艶々としたものだつたのです。

―― あゝ、彼處に綺麗なものがある　――
私は思はず聲を出した。

會計と學生が引返しました。

其の他の縁に、薄の根に、いましがた何の胸を
にっつたらうかと思ふ、扱帯が一條。燃ゆる錦、眞紅

な蔓で、池の影に紅を解きます。

ー やれ
それを取っては成りまし

ねえぞ。

訝かと思ふ大聲に呼掛けて、上の岨に肩を見せ
たが、背負梯子の薪の山。

で、観音經を手に讀みながら、山爺が顯れました。

息杖をかつて、えんや、と仰向けに腰を伸すと、
赧ら顔の口を開いて、

伯と婦人は言合したやうに、目を注いで見た。謙
介はやゝ酔つたらしい。

「其處で其の爺が話した所説があります。爺が、
現に見て知つてゐるつて言ふのですよ。ー」

「三年前の秋の未だと言ひます。同じ此の間道を、大涌谷の方へ、之は宮の下から駕籠で上る、五人連があつたさうです。

其の三つ目の眞中の駕籠に、美しい娘が乗つたが、石ころ路を仰向けに、眞俯向けに、急な上り下りで駕籠が揺れて、着崩れがしたのか、斜違に雁に行く乗物を落ちて、緋縮緬に菊の花の縫模様、長襦袢の片袖が、まるで八つ口から、這つて、しつとりと、地摺れに薄を行き、木の葉を通ふ。

人数は、しかし汚い駕籠舁の揃へた十本の息杖は、たゞ一つ其の片袖を漕いで、大空に行く櫂のやうで。爺は、ともすれば駕籠舁どもの肩に隠れ、毛脛に紛れる、其の美しい片翼に、顯で梶を取つて鼻の下を伸ばして見ながら、ちやうど、空身だつた足を爪立て、うか／＼とついて行つたさうです。

額へ打附りさうに、後の駕籠がストンと留る。前

のも、其その前まへのも、順じゆんに留とまつたさうです。

唯と、少時しばらくすると、ひやつ！ わつ！ と云いふ人聲ひとこゑ。
どや／＼と寄よる人ひと、立たつ人ひと、覗のぞく人ひと、緋ひの袖そでを包つんで重かさなり合あつた。が、其その娘むすめに別條べつてうがあつたのぢやない。
駕籠かご昇かきが一人千仞ひとりせんじんの斷崖がけへ落おちたのですつて。」

「えゝ。」

「いや、其それは。」

「それが、底そこも知しれない、巖石がんせきの磊々らいくとした谷たにを、黒雲くろくもの空逆そまかしまに、草鞋わらぢの裏うらで宙ちゆうに浮ういて、下したへも落おちず、足場あしばもなしに、切立きつたての崖がけへ、横生よこはえに成なつた櫳かしの樹きの枝えだを掴つかんで、ぶらりと釣瓶つるべで架かつて居ゐる。」

娘むすめを昇かついで居ゐた先棒さきぼうで、元氣屈げんきくつきやう竟わかな若わかい者ものだつたさうです。

其その櫳かしの木きに、細こまかい蔦つたが、可愛かはいく色いろを染そめて、それは／＼美うつくしく搦からんで居ゐた。娘むすめが根ねごと欲ほしい、と

云つたので。 おつとまかせ、御意なれ

ばで、右の先棒が、樹を抱いて、谷へ乗り出して、
枝に搦んだ梢を解くして、密と手繰り寄せたまでは
可かつたのです。 無理に引張る、と根

が切れさうな處から、樹の根を柱に、撞木乗で、草
鞋をづい／＼と踏んで、岨の縁から、身體を離して、
洞搜りに眞俯向けに根を掴んだ。あ、危い、危い。

よして頂戴 と其の娘も云

つたのに、こゝを先途と矢表に立つた意氣組。まつ
たくー (生命を斷つ斧) ー でせう。美

さに目が眩んで、もう一息と引く拍子に、足がにる
と其の始末。然も幹を離れた枝に縋つてぶら下つて
ゐるのですから、足は伸ばしても岨へ届かず、手は
揺上げても本木は抱けない。 客は驚く、

棒組は呆果てる。

助けてくれ、身體の重量で腕が切れる、と喚くん
でせう。 其の爺も、出来ない相談に預

つた、と言ひますが、如何とも手の施しやうが無か
つたさうです。

よく、其の瞬く間に、白髪に成つて了はなかつた
と思ふ、蒼く成つた顔を颯と眞赤にす
ると、先棒が、臨終の願望だ、何うか、お嬢さんの
紐を解いて頂いて、その端を樹に結んで投げてくれ。
それに縊る。尤も切れよう、助るまい。
が、決して思ひ置く事はない。何うせ、ひと呼吸の
間も堪らない、腕が抜けて落ちる。――と言ふ。

娘は帯を解いたんです。

棒組が、ふるへながら、樹の幹へ、扱帯の端を結
着けるのを、熟と視て、小塚山、金時、足柄を前に、
神の山、大ヶ嶽を背後に、上強羅の岨に立ちました
つけ。
娘は、目に一杯涙をためて、

――切れて落ちたら、私も飛んで死んで上げま
す。駕籠屋さん、確乎おし、――

冷い風は、燃立つやうな木の葉を揺つた。

駕籠舁は無事に袈婆の端へ吸附いたんです。

驚おどろくぢやありませんか。と肩かたを入いれると、息杖いきづえを
丁とん、すた／＼と駕籠かごを昇かき始はめたつて云いふのですが
ね。娘むすめは、わがねて、白しろい兩手りやうてに血ちのやうに戴いたいて、
あとの其その扱帶ししきを、同おなじ谷たにへ、風かぜにまかせて投なげた
んですつて　ー　ー　ー

「さあ、其の時は、赤い鳥が隠れるやうに、斷
 岨の木の葉に消えたんださうですが、後で日を代へ、
 月を代へ、年を経、時を違へて、彼方、此方、所々、
 場所を定めず、其の下締を爺も見掛ける。」

霞の中に山櫻の枝に掛る事もあり、紫の山藤と共
 に枝垂るゝ折もあり、燃ゆる躑躅に色を焦せば、月
 草の清水に丈を冷す。解けて撫子と添伏しもすれば
 巖石の角に朝日を結ぶ。山かつら、夕月夜。

風が乗せる時もあらう、水が誘ふ時もあらう、山
 鳥が尾に引いても行かう、兎が耳に掛けても飛ばう。

一度なぞは、荷擔夫が二人連で通りかゝつて、つ
 い路傍の草に、同じ下締の落ちたのを見て、目の色
 を代へて拾ふと、小半町歩いた時、ふと一人が聲
 をかけて、有りさうにもない魂消た紐だ、怪しい、
 禁厭であらうも知れぬぞ。其事　と吃驚
 して、手を拂いて、ふつと吹いて棄てゝ、あとをも

見ないで過ぎたのを、様子を知つた草刈の娘が見たと言ひます。

一所に死なうと誓つた情で、其の美しい人が、義のために、駕籠屋に捨てた、血です。眞紅の玉の緒です。――名所の魂です。――山神の装飾、女體の帯である。活きた山の主である。

――むざと手を着けては成りましねえ。――

(此を

爺が話しました。)

私は自分で、其の意味を其の時間きながら思つたまゝに、いま受け繼いで申しますが、あの、背負梯子で薪を背負つた山袴の爺が、もく／＼、と日南で其の魂の穂が女に成つて、ほろ／＼と白く遊ぶ、大勢の薄の前で、現に緋の絞の一條に向つて話した時は、もつと強い、激しい感動を與へられたのです。

ですもの、先鋒の一部隊勝り抜いた健兒を、非職

上りの陸軍中尉で、體育の教師の率ゐたのが、旋風の如く黒く成つて追着いて――何だ、何だ。
――。

どや／＼と取巻いた時は、私は眞直に突立つて、汗を流して、落ちた扱帯にいたづらするなど、遮つて留めました。

爺の言ふには、あは／＼笑ひ、私には、くす／＼笑つて聞いた。――會計と、も一人の學生は、しかし何とも言はなかつたのですが。――

――武士道のない國の話ぢや、俺が掴んで禪に締めたる！ 小隊分捕れえ。

五十くらゐで、まだ眞黒な髯が鼻の下に反返つて、針金のやうな白髪がバリ／＼と交つた非職が喚くと、健兒が先を争つて、靴を踏込んだものですから、私は仰向けに其の帯を背に敷いて、踏反り返つた。

行軍ですから、皆銃を持つて居ます。發火演習、

装薬さうやくがしてある。

此この一隊たい三十九人にん、

將軍しやうぐんの命令めいれいで、伏撃ふしうちに三十六挺ちやう、半圓はんえんを描えがいて、櫛くしの齒はの如ごとく銃口つうぐちを揃そろへて、私わたくしを狙ねらつた。一齊射撃せいしやげき、

――撃うてい、――

いや（雁先生がんせんせい）これには粟あはを喰くひましたよ。」

謙介けんすけは苦笑くせうした。女中ぢよちゆうが膳ぜんを引ひいた。酒さけのみを彼かれに残のこして。

十五

「今しがた見て通つた、大地獄の煙の中に、わつと聲を揃へて、笑つて、行進を續けて行つ了ふ。

私は目を瞑いで居たんです。背に敷

いた、帯と一所に、其の青い池の水の底に落込むやうでした。

罅が留んだよりか、寂寞する。はら／＼と、薄の穂の摺合ふ氣勢が、其方此方で、

―― おほ／＼。――

―― 撥ゆ、――

少し離れた處で、しく／＼と泣く聲がする。

―― 疼いかい、擦らうかい、――

―― 誰かお遁げだよ、――

白い背中が、すつと行く。

―― まあ倒れてさ、――
雪の胸が、なよ／＼と伏す。

―― あゝ、煙かつた、――
お起きなさいよ、――

私は寒く成つて目を開けました。寝ながら見る。
空の雲は、あの白いのが、大きく成つて、鷲の翼の
やうに暗く覗く。

降つて来たやうに、ちら／＼と穂が散ります。敷
いてる帯が動くらしい。私は衝と立つ
て密つと出ました。そして、一軒家の燈をちらりと
見る心で其の赤い紐を一度見ながら、すた／＼と急
いで。急いでと云つて、
さて、行く處ですが。

私は、ふん反つた時、もう、其の、崖へ落ちて奈
落の中途にぶら下つた氣なんですから、駕籠屋のつ
もりだ。馬士、旅藝人、勝手次第だ。

家はなし、しかも三男です。

何の憚

る處もないが、學校の連中には顔を見られたくないのです。尤も人間恂う成つちや極りが悪いも面目ないもありませんが、校紀振肅なんのつて、悪く捕虜にでもされて袋だゝきが可恐しい。忍んで箱根を抜けようと思しましたんです。

が（地獄へでも）と申しました。殺されるよ
り怖しい、いま時、雷が鳴らうとは思ひもかけず、
元來、眞黒な山の頭が、青い火を噴くの目眩
で、三島へ越えて、すぐに東海道へ流れようとする
足許を取違へて、塔の澤へ轉がりました。

――次第なんです。

お庇で、空も晴れました。

一體、私が、會計と今夜の旅宿を掛合に來た途中
で、くれたんですから、學校の連中は此の新屋か、
底倉の蔦屋あたりか、まるで、それを知らないで廊
下も針の山でしたが、それも違つたのが分りました。

一風呂浴びて、それから引下つて駕籠屋と寝ま

す。．．．．．御恩は忘れません。」

と八々と手を支いた、が、山氣冷かに肩寒く、廣袖の衣紋爽かに意氣頗る昂つた。

婦人の眉は凜として、瞼が曇るかど瞳を濃く、且つ艶やかに彼を見た。

「此處の廊下に萩はないのよ、今夜は籠の雪洞でなんか送つて上げません。お約束の、私と地獄へ行く途中、あすは、その薄原の扱帯を見せて下さいな。」

「願ひませうね。私も一所だと可いが、實は、今日です、お話の道筋一巡りして歸つたばかり、御覽なさい。澤山路草をしながら。」
と云ふ。

床の花瓶に、野菊、龍膽、此の貴公子の鳥兜、狩衣なるべし。藤袴。

「駕籠舁とお寝みなさる程なら、私たちとねえ、
きぬちゃん。」

「串戯ではありません。」

山巡のお

供と云つたつて、まだ駕籠は舁げません。あの、故
道の石塊を、御婦人には歩けますまい。」

「姐さん。」

婦人は笑ひながら、其處へ新しい煮花を運んだお
民を呼んで、襟の、先刻の紙包を解くと、

「これを細かくして下さいな、銀貨。小さな金
貨が交れば尚ほ結構よ。」

お民が妙な顔をした。大枚な紙幣であつた。

「金米糠と薄荷をお茶うけに、寝るまで何かし
て、遊びませうね。」

遊戯は古歌の六歌仙、六首かながき六角で、簪の
耳くらみ、象牙細工の小さな獨樂。

業平、小町、喜撰法師、其の六人を六つの札の、
おなじ象牙の彩色繪で、一組に、女の中指を切つた
程な、白い小函に紅枠で入つたのを、婦人は蝦夷錦
の娘らしい紙入の中から出して、伯の枕頭に、一寸
並べて、謙介と二人、それは褥で、晃々とした電燈
の下。――

それまでに、三人が一度温泉に浴した。伯は按摩
を取つて、寝ながら相手になると云ふ。其の按摩が
來て、搔卷越に。
按摩は天井を睨、専
ら揉む。

婦人はもう寝衣に着換へた。
藍と茶
の辨慶の縮緬浴衣を、透過る素肌に緩く、其の紅梅
に簾の雨の伊達巻で、大島お召の羽織を掛けた。湯
上りの色くつきりと、櫛巻の水際立つのが滴るばかり

り艶である。

其の膝へ、

いま、獨樂を出す次手に

紙入から、金貨の、小粒なのを十二三、ぱらりと置くと燦と輝く。

「此の分は、私のお菓子。」

伯は夜具の襟から腹這の顔を擡げて、

「豪いな、きぬちゃん、頂戴しようか。」

「え、成らば手柄に　　だわ。ねえ、

先生。」

謙介は驚いて唯傾いた。

「泣くなよ。」

「何うせ、お兄さんに頂いたんだわ、いつか。」

「さあ此も、　　金平糖と薄荷

ですよ。等分に分けて　　お兄さんは、蒲團の

上。」

「可し。」

「貴方、疊へ置くと汚れますから、此方へ。」
とて白紙を。

「廻りますよ。」
「爪紅の尖は其

の獨樂の心より華奢である。

「俺は坊主だ。」

謙介が、

「小町にしませうか。」

「え、御隨意。」

あそんは不可い。

私は業平
大將よ。

夜は十二時を半ば過ぎた。

の斑ある胡蝶の翼たゞくが如くに廻つて、
獨樂は歌
はたと留

まる。

「此は御馳走、」

「構ふもんですか。」

「でも私の分。」

「さあ、續いておいで。」

蝶の翼は、音もしないで、花片を吹動かす。

「按摩さん。」

婦人に唐突に呼ばれたので、

「はつ、」

と云つたが、密と覗込んだ顔を著しく反方に向ける。

「按摩さん。」

と見向きもしないで、獨樂を凝視めながら、もう一度呼ぶと、

「は、は。」

と膝を捻つて、俯向けた顔は、への字なりの口の
大きい、目の圓い、垂眉毛ですべりとして、頭を角に
刈つた奴。

「お前さん、見えるのね。」

「え、焼倅と片目、」

へい

「

「道理で、じろりと見た處が凄いわ、——

あゝ今度は先生、坊さんだわね。」

「飛んでもない。――へへへ。」と向う向
きに背いて、三つ莞爾つて三つ頤を刻んで、三つ肩
を揺つて、三つ膝頭を刻む。

「兄さん、私よ、金米糖。」

「差上げますよ。」

「按摩さん。」

「は。」

「名は？」

「あ？」

と仰向いて聞返す。

「名は何て言ふのよ。」

「横淵元琢と云ふんでげして、へい。」

「立派ねえ。」

「えへ、恐れ入ります。」

「さあ了つた。」

これは弱つた。今

度は大いよ。」

「運が向いて來ましたぜ、

御免。」

と謙介は胡坐になる。

「油斷をしちや不可ませんよ。貴方は素人だから。」

「さすがね、按摩さんや、

玄琢さんは可いけれども、横湍は可厭ね、何だか岡

引のやうだわ。」

「飛んでもない、御串戯、え

へ。」

「今度は。」

「小町よ。」

「さあ、持つておいでなさい。」

「矢張り私が。」

「また、小町。」

「可し。」

獨樂は飄々と唸を生じ、薄荷が金平糖を燦々と包んで、さら／＼と卵の花に黄金の蕊の翻る如く、謙介の袖を包む。

「矢張り、

先生

勝ち。」

「可し、みなに成つた。きぬちゃん、私の紙入

を。」

伯^{はく}は獨^こ樂^まを見^みないのである。
謙^{けん}介^{すけ}には、迅^{はや}くて獨^こ樂^まが見^みえないのであつた。

「眞平御免を。」廊下つたひに、夜中、見廻の弓張提灯、當旅館の番頭、及腰に座敷へ。

「唯今、御申附けでございました。二度目のそのお菓子でございます。帳場に用意の

ありましたゞけ、其の金米糖と薄荷をこれへ。」
と金齒をちらり。

「さあ、御註文が來ましたよ、兄さん、兄さん。あら、お寝つちや不可い、兄さん。」

「代理を頼むよ。」
それも現で、伯は、もう、すや／＼と寝入つたのである。

「大分、おほぐれに成りましたで。」と言ひながら、元琢は、じろ／＼と謙介の膝を睨む。

番頭は、首實験の如く提灯を眞正面に控へながら、
「御前は、今日は大分お草臥れ遊ばしたやうで

「ごぞいます。」

「もう、片附けませうよ。」

で、謙介が手で寄せると、ざく／＼と音がする。

其を聞くまいとか、元琢は獨りで頻りに頭を掉つた。

「お待ちなさいな。起さなくつちや、お兄さ

ん。」

横坐りの弱腰が伸びたと思ふと、伊達巻が颯と鳴る、裳が揃ふと、翩然と宙へ浮くやうに見えて、裊は隠れた。媚く肩が、白羽二重の搔卷の裏に、這つて、ト黒髪を上げた姿は、凄いまで美しい。

「兄さん。」

弟に添臥す如く、可愛げに、伯の優しい寝顔を覗いて、眉をすつきりと鼻筋の通る時、其のおくれ毛（ ）ーあとで知れたが、仔細あつて、或座敷で、伯の政敵の何某に、其の名取りの踊を、侮り嘲けられたゝめに、豫て姉への義理で、伯に我が思の叶はないのに、身をはかなんで居た折から、箱根へ

死なうとして来たのであつた。――）　　が露を
誘つて、はら／＼と。――

唯見ると臺の重いやうに、あのハアト形の肘を白
く、横顔を、やゝ蒼澄んで支へながら、がくりと、
投げるやうに外した腕は、雪の如く謙介の前の獨樂
に伸びた。

「さあ確乎なさいよ、兄さんのかはりに取返

す。

「番頭さん・番頭さん。」

按摩が伸出して呼んだが、番頭は、前垂に行儀よ
く突膝の掌を組んだまゝ、大に、抜衣紋で額越に見
惚れて居る。

「えゝ番頭さん。」

「あ。」

「貴方も嫌ぢやがあせんな。」

目の

毒でげす。」

「いや、腹の毒です。冷えますからな。」と、

たゞの夜番で寂しく出て行く。

「あれ。」

「やあ、何とも。」

と元琢のひれ伏す途端に、婦人は衾の錦の森、白羽二重の霞を抜け、次第に謙介の前に堆く成る金貨に惚けて、按摩の手が伯を揉越して、柔かな肩に這つたのであつた。

婦人は耳に掛ける様子もない。

「まあ、惜い、又」

「來給へ。姉御。」

「姉御は酷いのね。」

時に療治を濟ました元琢は、三つぶる／＼と手を握つて、居直つて、がつくりと成る。で、頬を横にして片目で見たが、凡そ堪らなく成つたらしい、じり／＼と膝を寄せて、凝と撓めて獨樂を視た。

「また、貴方勝よ。」

「難有い。」

「こりや、無茶だ。こりや無茶だ。
奥様は獨樂に構はず、たゞ此方の旦那に進げなさんだね。」

謙介が、愕然として、夢のさめたやうに顔を上げた時、あらう事が、慌てゝ手の甲で遮る間もなく、金米糖と、薄荷のために、木蓼の涎を垂々。

其が婦人の手に落ちた。

眞赤に成つて元琢が退いたあとで、婦人が艶麗に笑ひながら、

「もう一度湯に入りたい。一所に

来て頂戴、可恐いから。否、金米糖は

可いの、お兄さんと、トランプで相談済ですわ。
で連立つて猿の湯へ。」

廊下はづれに按摩が立つて、薄あかりに顔ばかり、
 此方を振り返つて變に笑つた。其の唇が大な、なめく
 ぢに見えて、遠く、山の石段を傳ふやうに、間近な
 裏梯子を下りる。
 草履の爪尖は、ちら
 ／＼と霜を散した。

下口に、
 來かゝつて、お民が立つ、
 ー 片除けつゝ待つて居た。

「姐さん、お銚子を。
 淡泊したも

ので可いんです。」
 「畏りました。」

浴室は遠くはないが、夜半の燈に、暗く且つ深か
 った。

婦人が一寸立止る間、湯殿へは一步謙介が早か
 った。彼が、さそくに廣袖を脱ぐ時、
 褌に提げた手拭より、なよやかに入つて來たが、黒

塗の衣桁の前。

横の壁に掛つた姿見を、ふと斜に視て、

「色が黒いわね。
薄り寝白粉とし

ませうかね。」

「按摩が片目で覗きますよ。」

「可厭！」

「此は、失禮。」

と、うしろ向きに温泉の中。颯と湯氣の靡く間があつて、

「先生。お化け。」

「男だ。可恐いもんですか。」

「先生。」

「雷様でなくつちや——窓の外は月夜で

す。」

「否、薄のお化に見えないこと？」

と、白雪の、鼓を縷る紅の調。一本薄に掛る緋の

葛。婦人は、伊達巻の紅梅を、はらりと頸に掛け、

腕に捲いて、片端を銜へてイむ、夜霧に、乳房がす

き透とほつた。

「私わたしなのよ

駕籠屋かごやに解といた下締したじめ

は。ー ー

玉たまは溶とけて、滑なめらかに湯ゆの脈みやくに染しむ。

溢あふるゝ煙けむりは婦人ふじんを誘さそうて、純白じゆんぱくな玉たまの緒をの穂ほが揺ゆれ
て、流ながるゝ如ごとく影かげを導みちびく。

十九

伯は、胸泰らかにすや／＼と眠つて居る。夢は維也納の麗姫であらう。

「兄さん、唯今。」
婦人は跪いて、襟を叩いて、そして来た。

別の座敷の、襖の隔を左右に開いて、伯と枕合はせに、同じ衾を並べたのである。

二つばかり盃をやりとりして、更めて、謙介が名を尋ねた時、婦人は被いだ搔卷を肩なりに、片袖を取つて、ト横にした。小枕淺黄の塗面に、はらりと敷くと、右手に黄金煙管の細いのを取つて、柔かに丁と上げた。氣は籠つたが、葵の上の鐵杖ならず、玉川の調布である。

「嬌然として、」

「砧。」

硝子戸越に、端山の雁がね。

婦人の名は砧であつた。

谿川の音も、ふと絶ゆると、七つの棟は皆眠つて、
名が聞ゆる名が聞ゆる。仙石の里の遠砧か、否、月
は細し、丑満時、宮ヶ嶽には神遊ぶ、笥を返す鼓で
あらう。

「明日は彼處へ行きませうね。」

彼方の床なる鳥兜を、藤袴を、其の龍膽を、――
其の狩衣の、紫に交る野菊の白さは、伯の寐顔を
装つた。

「何處へでも。」

「地獄へでも？」

「お易い事です。」

「峠の上へは？」

深い淵へ臨むが如く、瞳の下に酌を受けつゝ、

「勿論。」

「貴方、駕籠屋さんぢやなくつて？」

「まあ、私の云ふのは、其の時、峠へ落ちた駕籠屋なんですよ。」

「其の駕籠屋。」

「え、現に此の新屋に居ますわ。先刻、貴方が駈込んでお出でなすつた、夕立に焚火をして居たつて、門部屋の、あの夥間に居る筈よ。」

「や、其奴は、其以來、平氣なんですか。」

「平氣處ですか、——暢氣なものよ——

尤も峠から上ると、直ぐに、しやん／＼と駕籠を昇いたくらゐですから、然も其の日ぢやありませんか。大湧谷へかゝらうとする、巖の上で、銀の簪を拾つたの。其の先棒がですよ。然うすると後棒がね、

——嬢の若い奴は運がいゝぜ。轉んでも唯は起きねえたア汝だ。——

―― 難有え、其の通り ー

「慚うなんですもの。十八だつたわ、私、口惜かつたわ。私のために谷へ墜ちて ー 其の紐を解け、おもひ置く事はないつて ー 自分で言つては可笑いけれども。何よ、もしか、それが切れて落ちて了つたら、私、眞個に一所に飛込んで死んで遣るつもりだつたんですのね、」

瞳の露は夢を見た、
あの狩衣の俤を

視た。

「女の心ツて徹らないものね。」

「眞個、死なうと思ひましたか。」

「え、何時でも。」

「然う容易く？」

「直ぐでも。」

「其の時は 不 断 ま

た何だつて、そんな突詰めた氣に成ります。」

「何時か、話ませう、 明日は屹

とよ？」

「何處へでも。」

「地獄へでも　――」

「あら、其處の事よ、駕籠屋さんは口惜いつて云ふのは、成程、先刻はふつとした發奮で、女のを、魂を、燃ゆる思を、緋の扱帯の色を、身體で庇つて下すつたけれど、直きに又忘れてお了ひなさるんでせう。」

「砧さんの發奮と思ふ。」

「發奮で死ぬのよ、色も發奮だわ。でも忘れま

せん。」

「私も忘れない。」

と、ふと目を外らすと、枕頭の二枚折、張交ぜに小野小町、芥川、淺妻船、名家の映寫の色紙に交つて、短冊に（親和）とあつて、

駒とめて袖打拂ふ蔭もなし

佐野のわたりの雪の夕暮。

謙けん介すけは思おもはず、手酌てじやくして、杯さかずきの裡なかに、谷たにを想おもひ、
山やまを想おもひ、峰みねを想おもつた。

【完】